

令和2年度 学校評価実施報告書

学校名(下京中 学校)

教育目標

— 志 きらめく — Art Science Toughness

人の心を大切にし、多様な学びを通して持続可能な社会の担い手を育成する

年度末の最終評価

自己評価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し 学習アンケートでの「将来の夢や目指す目標に向かって、勉強することができている」という生徒の割合が〔昨年2月89.8%→86.9%〕、保護者アンケート「子供は学校に行くのを楽しみしている」の割合が、7月95.4%→12月90.7%と、概ね良好であるとはいえ悪化している。コロナ禍の影響により学校行事の中止、縮小や授業時間の回復のための7時間授業が影響している思われる。教育目標の達成に向けて、教職員一丸となって教育活動に取り組んできたが、生徒の不安やストレスは大きな課題であった。次年度は、カリキュラム・マネジメントの視点から、授業改善や人権課題の解決、伝統文化の継承、探究的な学習等を有機的につなげ、一体感のある教育の実践を継続するが、生徒の心に寄り添う支援について見直していきたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・感染予防対策を含めた教育活動全般について、概ねよく頑張っていると評価していただいた。課題である不登校生徒に対する取組は、難しい面も多いが、別室の取組をはじめICTも活用しながら個別最適化を念頭に、しっかり取り組んでもらいたい。 ・コロナの影響は大きく、社会全体に元気がなく、家庭の雰囲気も悪化していることがある。大人が明るく前向きに生活することが、子どもにプラスの効果をもたらすので、学校・家庭・地域と連携して大人がいい見本示す必要がある。

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	8月20日	学校評価委員会
最終評価	2月26日	学校評価委員会

(1) 「確かな学力」の育成に向けて 『学力向上プラン』

重点目標

資質・能力を育むカリキュラム・デザインの構築

具体的な取組

- 「資質・能力を育むための、教科の本質を踏まえた主体的・対話的で深い学びの授業実践」の確立
 - ・「対話的活動」「振り返り」のアウトプットの活動を重視し、学びを深める授業改善を推進し、授業デザインの確立を図る。
 - ・授業導入における意欲や関心を高める<つかむ>、展開の意見交流<交わる>、終末の振り返り<振り返る>の流れ<つかむ>→<交わる>→<振り返る>を確立させる。
 - ・教科会を通して教科指導の交流をより活性化させ、OJTを活用した指導力の向上を図る。
- 目ざす資質・能力を明確化し、カリキュラム・デザインの構築に向けた配列表・評価指標の作成
 - ・育成を目指す資質・能力として、主体性・忍耐力・協働力・自己表現力・論理的思考力・問題解決力・創造力の7つに重点をおき、その育成に向けて教科指導等に取り組む。その中に、どの時期に どのような場面で7つの資質・能力を育成していくのかについて明確にし、学習内容についてと目指す資質・能力についての2種の単元配列表を作成する。
 - ・全国の先進的な実践を取り入れ、教職員の指導力の向上に取り組む。
 - ・教職員全体への理解を深めるための研修会を実施する。
- 教科間の繋がりの明確化
 - ・各教科の内容を有機的につなげ、横断的・組織的に効果的に資質・能力の育成を図っていく。これまで以上に教科間の繋がりを強化し、多面的に資質・能力の育成を図る。また、総合的な学習の探究学習で行うポスター発表を英語で取り組む等、教科・領域を幅広く網目的につなげることを通して、学びを深める知識のネットワーク化を図る。
- 教科授業の改善と学力分析
 - ・京都市小中一貫学習支援プログラム等を活用し小中一貫した学力分析と対策の共有化を図る。
 - ・見通しをもった生活設計と自己管理能力を育成するための「きらめき手帳」の活用の徹底を図る。
 - ・自ら課題に気づき主体的に学ぶ意欲や態度を育むため、毎日の家庭学習課題を充実させる。
 - ・キャリア教育の視点をもって、一貫性がありつながりのある学習面と生活面の指導を行う。
- LD等支援が必要な生徒の学力向上
 - ・通級教室による学習支援と「学充（テスト前学充・土曜学充）の時間」の充実を図る。
 - ・個別の指導計画の教職員の共有化と、生徒一人一人の学習の躊躇の把握と丁寧な対応を行う。
 - ・個に応じた課題解決のためのICT（タブレット）を効果的に活用する。
- 言語活動と探究的な活動の充実
 - ・教科等における言語活動の充実を図り、図書館（マルチメディアルーム）を積極的に活用する。
 - ・総合的な学習の時間等において、討論活動やポスター・論文作成を通して言語活動の充実を図る
 - ・朝読書やビブリオバトル等を活用し読書活動を推進する。
- 外部刺激による研究・実践の充実
 - ・大学教授を講師に招き、パフォーマンス課題・評価等の先端の教育実践の研修を実施する。
 - ・先進校の取組事例に学び、互いに切磋琢磨する教職員集団を形成する。
 - ・情報交換の場の設定や視察受け入れ、地域の人材・学生等との協働により組織の活性化を図る。
 - ・学校運営協議会や保護者等の学校評価を活用した年度途中の自己検証機会を設定する。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・「授業は、自分の意見を発表したり、友達の意見を聞いたりして考えを深める場面がある」「授業は、学習内容を振り返ったり、まとめたりする場面がある」「授業の中で『分かった』『できた』と感じる場面がある」「将来の夢や目指す目標に向かって、勉強することができている。」(生徒学習アンケート)

- ・「生徒が主体的に取り組む授業づくりができている」「思考ツールを活用した学びを深める授業づくりができている」「家庭学習の習慣の確立ができている」（教職員評価）
- ・「子どもは宿題を家庭で行っている」「子どもは手帳等を活用し、計画的な生活ができている」

(保護者アンケート)

中間評価

各種指標結果

- ・「生徒が主体的に取り組む授業づくりができている」 57%
- ・「思考ツール等を活用した学びを深める授業づくりができている」 32%
- ・「家庭学習の習慣の確立ができている」 65%
- ・「授業の中で『わかった』『できた』と感じる場面がある」 93%
- ・「子どもは宿題を家庭で行っている」 84%
- ・「子どもは手帳等を活用し、計画的な生活ができている」 64%

自己評価

分析（成果と課題）

- ・資質・能力を育むための、教科の本質を踏まえた主体的・対話的で深い学びの授業実践が確立されつつある。「対話的活動」「振り返り」のアウトプットの活動を重視し、学びを深める昨年度の研究を活かした授業デザインが進み、分かりやすい授業が実践できている。
- ・生きて働く知識・技能を習得させるため、教科間を学習内容でつなぐ研究を進め、効果的に理解を深め、時間短縮にもつながる実践を進めている。
- ・各教科で身につけた資質・能力を活かした総合的な学習の時間で実践を始めている。縦割りグループでの探究学習を、生徒は意欲的に取り組んでいる。
- ・家庭学習として宿題に取り組む姿勢はある程度は定着しているが、自ら課題を見つけ、主体的にその解決のために取り組む態度は十分ではない。

分析を踏まえた取組の改善

- ・育成を目指す資質、能力の内容をより具体化し、生徒自身にも自覚させることにより、授業を通しての定着を目指す。
その方策として教科会を活用し、「対話活動」や「振り返り」のアウトプットにより、資質・能力を効果的に習得できる機会を創出する。
- ・GIGA 構想スクールによる PC を効果的に活用し、個別化最適化した学びを目指した、授業改善を進める。また、今後の臨時休校等に備え、双方向の授業ができる環境を整備する。
- ・課せられた家庭学習課題はできる生徒が増えたが、見通しをもち、次の学習につながる主体的に学びに向かう力を育成するために、「きらめき手帳」の効果的な活用と、授業の振り返りの実践を組織的に進める。

(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標

- ・「生徒が主体的に取り組む授業づくりができている」
- ・「授業の中で『わかった』『できた』と感じる場面がある。」

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

- ・臨時休校等により、学校は大変だったが貴重な経験ができた。昔から未来社会が予想通りになつたことはなく、急に予測不能になったわけではない。コロナ禍での経験を活かし、本当に必要なものと、なくてもいいものを見分け学校改革を進めるべきである。
- ・学校側の努力もあり、生徒は落ち着いて学習することがよくできている。
- ・家庭学習への取り組み等で、保護者の協力が不可欠であるが、保護者アンケートをより効果的

	<p>に活用し、改善を図るべきである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒がより活発に活動できる機会を設けてほしい。
--	--

最終評価

	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生徒が主体的に取り組む授業づくりができている」 80% ・「授業の中で『わかった』『できた』と感じる場面がある。」 93%
自己評価	<p>分析（成果と課題）, 重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「資質・能力を育むカリキュラム・デザインの構築～“問い合わせ”でつかみ、“対話活動”“振り返り”のアウトプットで深める授業を基盤とした効果的なカリキュラム・マネジメントの実践」をテーマに授業改善の研究を行うことによって、単元を通して、また、教科横断的な授業を通して資質・能力を育む研究活動ができた。 ・教育目標達成のために校内で設定した7つの力を培うために、ループリックを作成し、生徒の自己評価をもとに、力の育成の状況を分析した。 ・GIGA 端末を効果的に活用するために、3年生全員にPCを家に待ち帰らせ、オンラインで学習を行う等、学びを止めないための体制づくりを進めることができた。 ・家庭学習の定着のために“きらめき家庭学習”を取り組んでいるが、学習効果が十分ではなく、生徒の学習意欲につながっていないという反省があった。決められた課題を時間通りに提出するという、生徒指導面の効果だけに終わらない、家庭学習の取組を模索している。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内研究において3つのカリキュラム・マネジメント『①単元デザイン・授業デザイン②コンテンツ・ベース③コンピテンシー・ベース』に取り組んだが、コンピテンシー（資質・能力）・ベースによりカリキュラム・マネジメントにおける教職員の理解が十分ではない。次年度に向けて教科の見方・考え方を生かしながら、総合的な学習を核にした教科横断的に資質・能力を育成する体制の構築を進める。 ・GIGA 端末を有効に活用し、不登校や病欠席等の授業に参加できていない生徒の学習支援体制の構築を図る。具体的にドリルアプリや、オンライン授業配信の具体化を図っていく。 ・家庭学習の個別最適化を図り、一律一斉の学習課題を見直し、基礎から発展まで、生徒の学習状況に対応し、また、授業の協働学習の時間確保のために、効果的な家庭学習を計画する。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍において、感染予防を図りながら工夫した授業づくりが行えている。マスクの着用や、ソーシャル・ディスタンスの確保等でグループ学習や発表が行いにくい状況ではあるが、生徒は真面目に意欲的に授業に臨んでいる。 ・GIGA 端末の有効活用において、家庭のPC環境による個人差がないようにしっかり取り組んでもらいたい。先進地域では、すでに不登校対策にも取り組まれており、それらを参考にしながら、本校の不登校の課題解決に生かす必要がある。

(2) 「豊かな心」の育成に向けて

	<p>重点目標</p> <p>充実した道徳教育や支え合い高め合える集団づくりを通して、豊かな心を育む教育活動を推進する</p>
--	--

具体的な取組

○社会の一員としての自覚や社会のために尽くす精神の育成

- ・持続可能な社会の担い手を目指し、7つの力（主体性・忍耐力・協働力・自己表現力・論理的思考力・問題解決力・創造力）を培い、社会づくりに貢献できる人材を育成する。
- ・清掃活動等を通して、公共心や公徳心を培い、社会の一員としての自覚を高め、自己の生き方にについて考える機会を意図的・計画的に設ける。

○主体的、自主的、自律的な態度の育成

- ・夢をもち、目標の実現に向かい主体的に行動できる力を身につけるためのキャリア教育を進める。
- ・自己の将来展望を見据え、自分の生き方について、深く考えることのできる学習機会を設定する。

○支え合い互いに高め合える集団づくりと規範意識の醸成

- ・人権教育を基盤とした人間関係づくりを通して、多様性を理解する姿勢を涵養する。
- ・人の心を大切にし、他を思いやる心を育成するための、道徳の時間や人権学習を中心とした教育活動を充実させる。
- ・生徒会活動の活性化と学年・学級活動や部活動等における心の居場所となる集団づくりを行う。
- ・学校行事を通じ、学級や学年、学校への帰属意識を高めることによって愛校心を醸成する。
- ・学校と家庭との連携により法やルールの重要性を自覚させ、規範意識を育成することによって、「守らされているもの」という意識ではなく、自ら行動できる態度を育てる。
- ・人権侵害やいじめ・性被害等のSNSトラブルを未然に防止するネット利用のルールづくりを徹底する。
- ・家族や仲間等、周囲の人への感謝する心、公共心や公徳心を育成する。

○安全な環境整備と心の健康を意識した教育活動の推進

- ・考え方議論する授業、認め励ます評価によって道徳の授業を活性化させる。
- ・地域の人材を活用し茶道体験や和食調理体験、ゆかた登校などの伝統文化や地域の伝統産業を体験し、「ほんもの」に触れる学習を行うとともに、自らも伝統と文化の担い手であることを実感できる取組を充実させ、豊かな感性を醸成する。
- ・持続可能な社会の実現に向けて、総合的な学習での探究活動・体験活動等との関連を図り、道徳的価値の理解を深める指導を行う。

○いじめ防止、不登校対策の強化、共生社会の構築

- ・「報・連・相」の徹底と「学校いじめ防止基本方針」に則し、「見逃しのない観察」「手遅れのない対応」「心の通った指導」を学校組織として適切に行う。
- ・いじめアンケートやクラスマネジメントシートを活用した、いじめの予防と早期発見に向けて取組を組織的に実践する。
- ・いじめ対策委員会・不登校対策委員会を活用し、SCや関係機関と連携した細やかな対応を行う。
- ・学校運営協議会を活用した「社会に開かれた教育課程」による、地域活動に主体的に参画し、社会貢献する意識と行動できる態度を育成する。
- ・よりよい社会や生活、人間関係を構築するとともに、手話や点字、ユニバーサルデザイン等の学習を通じ、障害理解や互いを尊重し違いを認め合い共に成長し合える態度を育てる。
- ・生きる喜びや命を大切にし、充実した学校生活を送ることができる学校体制づくりを行う。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・「自分には良いところがあると思っている」「夢や目標をもって生活できている」「自分の気持ちを理解してくれる友達がいる」(生徒アンケート)

- ・「他者（多様生）を認め、思いやる指導・自分を大切にし、自己肯定感を高める指導・生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」「ルールを守る態度の育成ができている」

(教職員評価)

- ・「子どもは、自分を大切にした行動・仲間を大切にした行動ができている」(保護者アンケート)

中間評価

各種指標結果

- ・「自分のことを分かってくれる人が欲しいと思う」 23%
- ・「学校生活で嫌なことがある」 9%
- ・「他者（多様生）を認め、思いやる指導ができている」 86%
- ・「自分を大切にし、自己肯定感を高める指導ができている」 77%
- ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」 81%
- ・「ルールを守る態度の育成ができている」 93%
- ・「子どもは、自分を大切にした行動ができている」 97%
- ・「子どもは、仲間を大切にした行動ができている」 99%

自己評価

分析（成果と課題）

- ・コロナ禍の影響により、学校生活や友人関係に不安を抱える生徒が多い。教育相談の時間を十分に確保できず、生徒の心に寄り添った細やかな指導に課題が残っている。
- ・規範意識については、課題は少なくルールや校則に沿った健全な生活ができている。
- ・家庭内の課題に起因した自傷行為をする生徒も存在し、引き続き命を大切にする教育を進めていく必要がある。また、虐待につながりかねない家庭問題を抱える生徒も存在し、相談しやすい体制づくり求められている。
- ・ネットの不適切な使用により、トラブルが複数起きており、情報モラルの指導がより重要になっている。

分析を踏まえた取組の改善

- ・学校教育目標である「人の心を大切にする」指導に重点をおき、自他の命はもちろんのこと自分の考えを正しく伝え、相手の考えをしっかりと聞く、コミュニケーション能力の育成を強化する。
- ・懇談会や教育相談を活用し、生徒・保護者の不安な心情に寄り添う指導を進める。また、日常的な教員からの声かけや見守りを継続していく。
- ・リストカットやオーバードーズ等の自傷行為について、迅速に研修を行い、自殺予防に繋げる適切な指導を進めていく。
- ・SNSを正しく利用させるための情報モラル教育を適切に行い、トラブル防止だけでなく情報活用能力の育成につなげる。

(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標

- ・「他者（多様生）を認め、思いやる指導・自分を大切にし、自己肯定感を高める指導・生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」「ルールを守る態度の育成ができている」
- ・「子どもは、自分を大切にした行動・仲間を大切にした行動ができている」

学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒や保護者からのアンケートの方法を工夫し、他校の状況と比較したり、前年度からの変化の分析を進めていく必要がある。 臨時休校が生徒や保護者に与えた影響は大きく、学校の存在がクローズアップされた。学校は今やるべきことと、今やらなくてもいいことの仕分けを進めるべきである。 SNSに関する課題は、社会的にも大きな問題である。保護者への啓発を進め、地域でも生徒の様子をしっかり見守り、トラブルの未然防止に努めたい。
-----------------------------	---

最終評価

自己 評 価	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> 「他者（多様性）を認め、思いやりの指導ができている」 100% 「自分を大切にし、自己肯定感を高める指導ができている」 87% 「ルールを守る態度の育成ができている」 92% 「子どもは、自分を大切にした行動ができている」 94% 「子どもは仲間に大切な行動ができている」 97% <p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> コロナ禍により集団づくりが十分に行えなかつた影響からか、人を傷つける発言やいじめ問題があった。学校教育目標として「人の心を大切にする」を掲げているが、人権学習をはじめ、相手を思いやりの態度や心優しい行動ができる集団づくりにつながる取組を行う必要がある。 不登校の課題解決のための「マイ・プレイス」と名付けた別室では、常時2～4名の生徒が登校し居場所づくりとなった。1・2年生は各十数名の生徒が不登校に近い状態となっているため、この別室の活用だけでなく、GIGA端末も効果的に活用し、学習支援とつながりの継続に役立てていきたい。 ケータイ・スマートフォン等のSNSトラブルの数はわずかではあったが、情報モラルについて、引き継ぎ系統だった指導が必要である。 <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> クラスメイトをからかういじめ事案の解決のために、エンカウンターやいいところ探しを取り入れた学級活動等を行い、互いを認め合う集団づくりをする必要性を感じ、学年行事等の取組を企画し実施していく。 臨時休校の影響により、1回目の教育相談の時間が不十分であった点を反省し、2回目の教育相談には、アンケート等を活用しながら適切な相談時間を設けることができたが、今後は、定期的の教育相談だけでなく、生徒がいつでも気軽に相談できる体制の充実を図りたい。 不登校への取組である「マイ・プレイス」については、一定の成果を上げることができているが、新たな不登校を生まないための相談活動の充実や、個に応じた学習支援に取り組む必要がある。 クラスマネジメント調査、いじめアンケート、教育相談アンケート等を連動させ、正確な生徒・学級の実態把握を進めるとともに、適切な指導を行うための判断材料として活用していく。 本校が抱える地域の人権課題について教職員が常にアンテナを張り続け、社会の不条理な出来事や人権侵害の課題等、当事者意識をもった人権教育を続ける必要がある。
--------------	--

学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> いじめ問題は依然大きな課題であるが、学校の雰囲気は大変良く、教職員の生徒に対応する様子も良好である。この状態を維持することが、いじめの未然防止につながる。 コロナの影響で家庭の状態が悪化しているケースがある。家庭環境の変化が、いじめにつながらないように、生徒の様子をきめ細かく見ていく必要がある。 挨拶をしっかりできる生徒が多いことに安心しているが、社会に出てからの孤立の未然防止のためにも、コミュニケーションの力をしっかりつけるさせてほしい。
-----------------------------	---

(3) 「健やかな体」の育成に向けて

重点目標

社会との関わりを踏まえた、人間としての生き方を見つめさせる指導の充実と環境の整備

具体的な取組

○望ましい生活習慣の確立

- 健康を保持し規則正しい生活の習慣を確立するため、睡眠の重要性の啓発と、飲酒・喫煙・薬物乱用の有害性について正しい知識と危険な行為から身を守る指導を徹底する。
- 性について、正しい知識と適切な行動に関する指導を人権学習とクロスさせながら充実させる。
- 家庭と連携・協働しネット依存による学習や睡眠時間への影響の啓発と、使用時間の制限等のルールづくりとそのルールを守る態度を育成する。
- 運動やスポーツに親しみ、健康を大切にする態度を育てる。

○道徳教育の充実

- 他者への思いやり等の道徳的価値を理解し、主体的に判断し適切に行動できる態度と、集団として高め合える態度を育成する。
- 道徳教育推進教師を中心とした、教育活動全般において道徳教育を推進する。

○自己指導能力の育成

- 生徒が自分や自分たちで考えて決めて実行する“自己決定の場を与える”を意識的に設ける。
- 生徒一人一人をかけがえのない存在として捉え、他者のとの比較ではなく生徒の個別性や独自性を大切にした“自己存在感を与える”関わりを意識的に行う。
- 教職員と生徒、生徒と生徒が互いに尊重し、理解し合える“共感的な人間関係を育成する”。
- 集団の一員として協力する態度、ルールや法の重要性を理解して自ら行動できる態度を育成する

○保健体育の授業及び部活動の充実

- 保健体育授業の時間確保と運動環境を整備する
- 部活動時間のあり方を見直し、適切な活動時間と家庭・地域で過ごす時間を確保し、心身の健康を増進し、自尊感情を高めることができる充実した時間となるように取り組む。

○学習環境の充実

- 保健室、SC室等の心理的な“空間”的整備と、 “空間”を効果的に活用した心理的変化の早期発見の場となる運営を行う。
- 不登校傾向の生徒の心の居場所となる別室指導の体制を充実させ、心の成長とコミュニケーション能力の育成を図る。
- ケガや病気を防ぎ、健康的で安全な教育環境の維持のために日常的に取り組む。
- 施設などの安全点検と迅速な修理修繕による安全整備を実施する。

○安全教育の充実

- ・危機管理マニュアルに基づいて、研修や訓練を行い、家庭との共通理解を図る。
- ・生徒自身が学校や地域での危険を予測し、災害発生時に適切に行動できる学習を充実させる。

○教職員の肉体的精神的安定を図るための組織づくりの確立

- ・教職員自体が健全な心身を持つことが、教育活動の充実を図るために不可欠であり、職場内の絆づくりを積極的に取り組める組織づくりの確立を目指す。
- ・教職員の健康保持のため、勤務の効率化を進め、時間外勤務の短縮を図る。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・「朝食を毎日食べている」「毎日よく眠れている」「何かイライラしてしまうことがある」
(生徒アンケート)
- ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」「規則正しい生活習慣の確立ができる」として評価
- ・「子どもはルールや決まり事を守ることができている」(保護者アンケート)

中間評価

各種指標結果

- ・「朝、起きにくくぼーっとしている」 47%
- ・「夜、眠れないことがある」 22%
- ・「誤もなく腹が立ってくることがある」 10%
- ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」 81%
- ・「規則正しい生活の習慣の確立ができる」として評価
- ・「子どもはルールや決まり事を守ることができている」 90%

自己評価

分析 (成果と課題)

- ・臨時休校の影響により生活習慣を乱した生徒も多く、不規則になった就寝・起床時間が学校での生活に支障をきたすことがあった。
- ・学校のルールや規則は守ることはできているが、ケータイの使用に関してのルールについては課題が根深く、家庭内のルール作りを含めた取組を続ける必要がある。
- ・不登校の生徒が1年・2年で増え続けており、別室等での対応等を進めているが、十分な指導はできていない。
- ・部活動ガイドラインはほぼ遵守され、過度な活動時間はなく、土日も含めて適切な指導ができる。

分析を踏まえた取組の改善

- ・保健教育を充実させ、規則正しい生活習慣を確立させるとともに、薬物やタバコについて健康教室を適切に実施していく。
- ・不登校を新たに生まないことを目標に、生徒の些細な変化も見逃さずに、相談体制を充実させる。別室に登校する生徒についても、心の居場所づくりに重点をおき、教室復帰を前提としない関わりを継続していく。
- ・生徒指導三機能チェックリストやいじめアンケート・クラスマネジメントシート等を有効に活用し、安全で安心できる環境づくりを進めるとともに、生徒の自己指導能力の育成につながる教育活動を実践していく。
- ・部活動ガイドラインの徹底により家庭学習の時間を確保し、学校と家庭が連携して、学力向上を図るとともに、生徒自身が達成感・充実感を得る部活動指導を進めていく。

	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 <ul style="list-style-type: none"> ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」 ・「規則正しい生活習慣の確立ができている」 ・「子どもはルールや決まり事を守ことができている」
学校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策 <ul style="list-style-type: none"> ・不登校生徒を対象にした別室の取組等を充実させ、これまでの学校教育にとらわれない、生徒が主体となった指導を継続してもらいたい。 ・コロナ禍の影響により地域行事はほぼ中止になっているが、地域での挨拶の励行や、家庭や地域が子供を見守る姿勢を持ち続け、健全育成に向けて学校と連携することの大切さを再確認しなければならない。

最終評価

	中間評価時に設定した各種指標結果 <ul style="list-style-type: none"> ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」 90% ・「規則正しい生活習慣の確立ができている」 82% ・「子どもはルールや決まり事を守ことができている」 87%
自己 評 価	分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題 <ul style="list-style-type: none"> ・感染予防のためのマスク着用や教室内の換気、昼食時の黙食について、しっかり実践することができ、校内感染が発生することはなかった。規則正しい生活については概ね確立しているが、心の不調を訴える生徒は増加している。 ・感染予防のために、保健体育の授業の内容に工夫が必要であった。生徒は運動を楽しんでいる様子であったが、ケガをする生徒は依然多く、日頃からの運動の習慣を課題として感じた。 ・臨時休校明けの授業時数確保の中で、目や歯の健康教室を開催できなかったが、コロナ禍の影響により健康への関心は高まり、手洗いや体調管理を適切に行うことができた。 ・学年末に薬物乱用防止や性教育についての啓発学習を行ったが、外部講師等を活用しながら、適切な指導を継続する必要がある。
	分析を踏まえた取組の改善 <ul style="list-style-type: none"> ・感染防止対策については、引き続きしっかりと行う必要がある。また、感染防止に役立つ生活習慣を確立させるとともに、差別や偏見を生まない正しい理解と行動を身につけさせる。 ・心の不調を訴える生徒や不登校の課題解決のために、相談体制を充実させる。GIGA 端末等を効果的に活用し、健康観察の際の相談ができる体制を構築する。 ・京都府中学生の大麻使用事案を重く受けとめ、薬物乱用防止について、教職員研修や家庭啓発を行い、現状を正しく知る必要がある。また、自傷行為や希死念慮についても、当事者意識を持って研修、指導を行うための計画を作成する
学校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策 <ul style="list-style-type: none"> ・感染拡大防止の対策をしっかりと行うことができている。換気をしながらの防暑、防寒の対策として服装の自由度を高める等、柔軟な対応をしていることは、保護者に安心感を与えていている。但し、服装の自由度を高めたことにより、身だしなみにルーズになることも懸念されるため、メリハリをつけた指導を続けてもらいたい。 ・コロナ禍によるストレスでうつ状態になる子どもが増えている社会情勢を踏まえ、学校、家庭が連携して子ども見守り、大人が明るく振る舞うことが大切である。

(4) 学校独自の取組

重点目標
キャリア教育の推進を視点に学校行事運営や生活指導・部活動指導を進める
具体的な取組
○道徳の時間において、22項目のそれぞれがキャリア教育の基礎的・汎用的能力のいずれに当てはまるのかを明確にした実践
○総合的な学習の時間において、「人権学習」「生き方学習」「伝統文化体験学習」「探究学習」の4つの分野のそれぞれでキャリア教育の視点をもち、自己の生き方を考える取組の実践
○キャリア教育の視点に立って特別活動・生徒会活動の実践
○キャリア教育の視点に立っての部活動指導
(取組結果を検証する) 各種指標
・「授業で学んだことが他のことにも生かされている」「将来の夢や目ざす目的に向かって勉強することができている」(生徒アンケート)
・「探究学習を充実させた指導・伝統文化体験学習を充実させた指導ができている」(教職員評価)
・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し大切にできている」(保護者アンケート)

中間評価

各種指標結果
・「授業で学んだことが、他のことにも生かされている」 82%
・「将来の夢や目ざす目的に向かって勉強することができている」 87%
・「探究学習を充実させた指導ができている」 48%
・伝統文化体験学習を充実させた指導ができている」 48%
・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し大切にできている」 78%
自己評価
分析 (成果と課題)
・臨時休校の影響により、道徳の時間の捻出を工夫しながら進めている。持回り道徳の手法も活用ながら道徳教育の充実を図り、キャリア教育の視点を当てはめることにより、自分の生活を振り返り、見通しをもった行動するための指導を進めている。
・道徳の時間において、副読本等を有効に活用し、認め励ます評価を適切に組みながら 22 項目の実践を行っている。
・学校教育目標達成に向けて、総合的な学習の時間の「人権学習」を Human Time、「生き方学習」を Toughness Time、「伝統文化体験学習」を Art Time、「探究学習」を Science Time として、4 分野において育成を目指す力（論理的思考力・自己表現力・問題解決力・創造力）の習得に向けて取り組んだ。
・学校行事が中止・縮小が続く中、限られた行事ではあるが生徒が主体的に取り組む活動ができ、自己指導力のある生徒の育成につながる実践ができた。
分析を踏まえた取組の改善
・授業時間が不足している状況を踏まえ、学級活動や学校行事を行う際に、キャリア教育の視点をもって取り組むとともに、道徳的価値を明確にして効率のいい実践を心掛ける。
・教科授業での学びを他教科とつなげ、知識・技能を生きて働くものにするとともに、将来に役立つと実感できる授業実践を行う。
・カリキュラムマネジメントの視点に立ち、総合的な学習の時間を核として、教科で身につけた

	<p>力が活用される効果的な学習を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学年で行う縦割り探究学習の中間発表であるポスター発表会に、学校運営協議会理事や、はぐくみネットワークの役員の方に参加してもらい、世代を超えた意見交流の場を設ける。 <p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業で学んだことが他のことにも生かされている」「将来の夢や目ざす目的に向かって勉強することができている」 ・「探究学習を充実させた指導・伝統文化体験学習を充実させた指導ができている」 ・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し大切にできている」
学校 関係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の中、多くの体験学習が中止になることはやむを得ないが、代わりとなる学習活動を工夫して実施してもらいたい。 ・探究学習において、自分事として SDGs に取組ることはとても良いことである。また、発表会に地域の大人が参画することは、子供の現状を知るのに役立ち大いに意義がある。 ・コロナの影響により、仕事・収入面で厳しい状態の保護者が増えていると推測される。困難な状況ではあるが、この経験を学びにしっかりと繋げ、今後の糧にしてもらいたい。

最終評価

	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業で学んだことが他のことにも生かされている」 82 % ・「将来の夢や目ざす目的に向かって勉強することができている」 87 % ・「探究学習を充実させた指導ができている」 66 % ・「伝統文化体験学習を充実させた指導ができている」 71 % ・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し大切にできている」 85 %
自己 評 価	<p>分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科横断的な視点をもったカリキュラム・マネジメントの研究に取り組んだ成果として、他教科の授業内容とつなげて知識・技能を理解することができた。生きてはたらく知識・技能として、他のことに活かされる授業を多く実践することができた。 ・SDGs をテーマに縦割りでの探究学習 (AST タイム) に総合的な学習で取り組むことができた。教科で身につけた資質、能力の活用を目指す取組であったが、各教科の学びが活かされ、生徒が主体性をもって探究活動をすることができた。 ・道徳の時間について、臨時休校の影響により時数の確保は難しかったが、22 項目についてはしっかりと取り組むことができた。また、持回り授業を取り入れたりしながら、工夫した活動を行うことができた。 ・コロナ禍により、本校独自の行事である浴衣登校等の総合的な学習においての地域との連携した取組はできなかったが、外部人材を活用し、茶道体験や伝統衣装の学習を行うことができた。和食調理体験についても、緊急事態宣言の解除後に実施することができ、生徒は本物にふれることにより、充実した学びとなった。 ・生き方探究チャレンジ体験は中止となったが、6 つの事業所の方に来校いただき、勤労観、職業観の醸成につながる講演会を実施した。また、卒業生の紙芝居師にも講演に来ていただき、生徒の自己実現に向けて効果的なキャリア学習をすることができた。

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習を核とした資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントの研究を進めたが、教職員の理解に不十分な面があった。研究2年目となる次年度につなげ、各教科との横断的な学習を再構築していく。具体的には、校内で定める7つの力〔主体性、忍耐力、協働力、論理的思考力、問題解決力、自己表現力、創造力〕を教科ごとにより明確にし、作成したループリックを活用しながら、その定着を目指していく必要がある。 ・総合的な学習の整理を進めるとともに、特別活動と連動させながら生徒が主体的に学びに取り組み、協働的に学ぶ体制づくりを行う。 ・道徳の時間の評価については、教職員の理解も進み、滞りなく適切な評価が実施できた。評価を活用しながら、家庭と連携した道徳教育をより効果的に進めたい。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SDGsをテーマに全校で取り組んだ探究学習のポスターセッションに参加したが、難しい内容にもかかわらず、生徒が意欲的に活動している様子がよく伝わった。教科の学びを超えた、このような探究学習は、必ず将来に役立つと思われる。 ・コロナ禍により、地域と連携した行事が中止になったことは残念であったが、学校として様々な工夫を凝らして別の形態で取り組めたことは良かった。生徒にとっても何もかも中止になるのでなく、その場に応じた対応を経験できたことは、今後に役立つと思われる。

(5) 教職員の働き方改革について

	<p>重点目標</p> <p>時間外勤務時間の削減と業務の効率化・適正化の推進</p>
	<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間外勤務時間の削減に向けた教職員の意識改革を図るため、他校の取組や成果を伝達する。 ・業務の効率化を図るため、職員会議等の資料のペーパレス化や、会議の精選を行う。 ・定期テスト最終日の部活動の時間短縮を行い、採点業務の時間確保を進める。 ・三者懇談会や家庭訪問時の部活動時間の短縮を行い、臨時顧問等の負担を軽減する。 ・事務職員や管理用務員が、学校行事の運営や配布物印刷等の役割を担い、教員の負担軽減を行う。 ・学校支援ボランティア、観察実験アシスタント、総合育成支援教育ボランティア、学びのパートナー、学生ボランティアを活用し、授業や部活動、生徒支援の充実を図るとともに教職員の負担軽減を行う。 ・部活動指導員や外部コーチを活用し、部活動指導の充実を図ると同時に、顧問の負担軽減を行う。 ・部活動ガイドラインの徹底を図り、効果的な部活動を行うと同時に、顧問の負担軽減を行う。 ・留守番電話機能を活用し、保護者に対して勤務時間の理解と業務時間の縮小を図る。 ・年休取得促進と健康増進の推進を図る。
	<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <p>「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」「自己の健康管理」(教職員評価)</p> <p>「教職員の表情はイキイキしていると思いますか。」(学校関係者アンケート)</p>

中間評価

	<p>各種指標結果</p> <p>「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」 64%</p>
--	--

	「自己の健康管理」 62%
自己評価	分析（成果と課題） <ul style="list-style-type: none"> 働き方改革の意識が浸透し、メリハリのある勤務ができる教職員が増えている。 校務支援員の配置により消毒作業や印刷業務をはじめとする細かな業務の支援により、教職員の負担が軽減された。 部活動支援員・外部コーチ・総合育成支援員、学びのパートナー、学生ボランティアと様々な制度をフル活用し、生徒への手厚い対応とともに教職員の業務の軽減を図ることができた。 「統一閉鎖日」の取組は定着し、健康保持への教職員の意識は高まっている。
	分析を踏まえた取組の改善 <ul style="list-style-type: none"> 全体的には勤務時間に関する意識は変容してきたが、一部の従来と変わらない勤務を続ける教職員に対して働き方改革の趣旨を再度徹底する。 ペーパレス化や会議時間の縮小等、再度、勤務の見直しを図り、勤務状況の改善を進める。 教職員間のコミュニケーションをスムーズに行い、風通しがよく働きやすい職場環境づくりに努める。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 <p>「教職員の表情はイキイキしていると思いますか。」（学校関係者アンケート） 「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」「自己の健康管理」（教職員アンケート）</p>
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 <ul style="list-style-type: none"> コロナの影響もあり、教職員が疲れていないかを心配している。教職員が健康で元気がなければ、生徒に悪影響を及ぼすことを自覚し、健康保持にはこれまで以上に留意してほしい。 授業時間の回復、いじめや不登校と課題が山積する中、すぐにできることと、時間がかかることを仕分しながら、保護者や地域と連携して課題解決を進めていくべきである。 コロナ禍により、学校というものの存在の大きさを社会は再認識した。学校が大変であることは、保護者も地域も十分に理解しているので、学校だけで全てを負う必要はない。

最終評価

	中間評価時に設定した各種指標結果 <p>「教職員の表情はイキイキしていると思いますか。」（学校関係者アンケート） 91% 「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」「自己の健康管理」（教職員アンケート） 72%</p>
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 <ul style="list-style-type: none"> 「働き方改革」を意識しながら勤務の改善を図る教職員は増えている。超過勤務の状況は概ね良好であるが、一部は依然、改善が進んでいない。 総合育成支援員、校務支援員、部活動支援員、外部コーチ、学びのパートナー、学生ボランティアと様々な制度をフルに活用し、感染対策をはじめとする教職員の業務の軽減を図ることができた。 職員会議や職員研修を効率的に運営することができたが、学年会議については長時間に及ぶことも多々あり、今後、事前準備や内容の精選を図る必要がある。 部活動終了後の時間は効率的に業務を進めることが優先され、生徒の情報交換や教科会等の打合せの時間を十分確保することができなかつたことが、今後の課題である。

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・超過勤務 45 時間以内を目指し、より効率的に業務を進める必要がある。業務に優先順位をつけ、やらなければならない業務とやった方がいい業務の線引きを図りながら、質を低下させずに、効果的な教育活動を行える体制を構築する。 ・業務の内容を分かりやすく見える化しながら、一部の教職員に負担が偏ることがないように留意して、業務を適正に割り振る必要がある。 ・誰もが気軽に相談できる、助け合える雰囲気づくりを行い、風通しのいい職場環境への改善を進め、働きがいを感じる改革が進むように、運営委員会メンバー等で率先して行動する。
学校 関係 者評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「働き方改革」が目的ではなく、改革をして何をするのかが目的であることを、はき違えないようにすべきである。これから教職員の生活の在り方を考え直し、オンライン等を有効に活用しながら、これまでの勤務状況の改善を進めなければならない。 ・「うまくいっていること」は、現状のまま続け、「うまくいっていないこと」について、その原因を考え改善することが、働き方の改革につながっていく。